

狩野さんを偲ぶ

島野卓爾

昨年の夏休みに学習院の教職員有志がゴルフを楽しもうというわけで、狩野さんをご自分がメンバーである龍ヶ崎カントリークラブをアレンジしてくださった。このコースは、先年河野豊弘先生がご退職になられるのを記念して、三人で回ったところだけに、私としても久しぶりに狩野さんとプレーできるのを楽しみにしていた。ところが当日ご欠席との知らせを受けどうしたのだろうと思ったが、今考えると、そのとき狩野さんは手術をうけたのであった。秋になり狩野さんが教授会に出席されたとき、少し顔色が悪く気になったが、いつもの温和な狩野さんであった。

今年になって、ときとして教授会を休まれるようになったとき、養生され体力の回復に努めておられるのだろうと、私は勝手にいい方ばかりに解釈していたが、ご容態がこれ程までにお悪いとは知らず、まことに申し訳ないことをしてしまった。気軽に相談に乗ってくれた甘えのまま何ひとつ恩返しもしないうちに、狩野さんに先立たれてしまった。まことに痛恨の極みである。

狩野さんと私は昭和3年生まれで同年で、専門が異なるとはいえ、経済学部と同僚であることもあって、何かにつけて親しく話し合える間柄であった。65歳ともなれば決して若いとはいえず、さりとて老年とは言われたくないという互いの気持ちが通じ合っていたので、われわれはまさに熟年だと笑ったこともあった。熟年の「熟」には、「よくみのる」「なれて上手になる」「十分なところに至る」といった意味がある。こうした意味内容は、狩野さんのように、温厚で、つねに謙虚に努力を重ねてこられてきた研究者にこそふさわしいものであろう。熟年の生きざまは、それぞれの専門でプロの道に徹することと私は考えてきたし、またいまでもそう考えているので、せめて定年まで狩野さんに教えられながら、一緒に熟年の楽しさを味わいたかったと今でも思う。しかし、それも最早叶わぬこととなり、まことに残念でならない。

私が狩野さんに惚れ込んだのは、狩野さんの学習院に対する思い入れと愛情のためである。思い入れと愛情は、先年、狩野さんが学習院常務理事として、大学だけでなく、学習院全体を管掌した貴重な経験と大きな功績を通じて、さらに強まったものと思われる。学習院育ちの私から終戦直後の学習院の様子を聞きながら、狩野さんが折にふれ、ゆっくりとした口調とやさしい眼差しで、どうすれば学習院がさらに発展するかについて意見を述べられたときの深い感動を私はいまでも忘れることができない。

学習院をさらによくしたいという強い願望も手伝ったのであろうか、狩野さんは、毎年の経済学部入学試験に大きな関心を示された。男女高等科からの進学、一般入試、推薦入試、海外帰国子女入試の在り方とバランスについて貴重な意見を教授会でしばしば述べられただけでなく、推薦入試の際、付き添いの父兄に対し懇切丁寧に学習院の良いところを説明されてきた。こうした親切なこころ配りは学生に対しても同様で、とくに公認会計士、税理士試験合格者をさらに増やすために費やされたご苦労は大変なものであった。こうした地道な、しかしたゆむことのない狩野さんの活動に対して、経済学部同僚一同、深い感謝を捧げてきたところである。

狩野さんとの思い出は尽きない。こうして追悼号に一文を寄せるとき、狩野さんのやさしい眼差しが眼に焼き付き、同僚・友人としての痛惜の情禁じがたく、これ以上長く語るべき言葉を知らない。ただ、ご冥福を祈るばかりである。